

琉球大学学術リポジトリ

イリオモテヤマネコとツシマヤマネコの行動圏と空間配置に関する比較研究

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム 公開日: 2009-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺西, あゆみ, 中西, 希, 伊澤, 雅子, Teranishi, Ayumi, Nakanishi, Nozomi, Izawa, Masako メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/9884 |

イリオモテヤマネコとツシマヤマネコの行動圏と
空間配置に関する比較研究
(Comparative study on home range of the Iriomote cat and the
Tsushima leopard cat)

寺西あゆみ・中西 希・伊澤雅子
(Ayumi Teranishi, Nozomi Nakanishi, Masako Izawa)

琉球大学理工学研究科・理学部海洋自然学科

国内には野生ネコ科としてイリオモテヤマネコ *Prionailurus bengalensis iriomotensis* とツシマヤマネコ *P. b. euphilura* が生息している。どちらも島嶼に生息しているが、その生息環境は大きく異なっている。単独性食肉目の行動圏の面積や空間配置は、メスは餌資源の、オスは餌資源と繁殖相手となるメスの分布・量によって影響を受ける (Sandell 1986) ことから、異なる気候、地形、動物相をもつ島嶼に生息するこの 2 亜種間では、行動圏に関わる特性が異なることが予想される。そこで本研究では、これまで蓄積されている追跡データを用い、1983 年から 2006 年のイリオモテヤマネコと 1994 年から 2006 年のツシマヤマネコの定住個体の行動圏面積と空間配置の比較を行った。

イリオモテヤマネコの行動圏面積はオス $4.5 \pm 2.3 \text{ km}^2$ (平均 \pm SD, $n=14$)、メス $2.7 \pm 1.1 \text{ km}^2$ ($n=8$) であった。行動圏の重複率は、オス間で $13.0 \pm 16.8\%$ ($n=20$)、オス・メス間で $59.6 \pm 28.8\%$ ($n=22$)、メス間で $21.5 \pm 24.0\%$ ($n=8$) であった。ツシマヤマネコの行動圏面積は、オス $12.1 \pm 9.0 \text{ km}^2$ ($n=4$)、メス $1.8 \pm 0.7 \text{ km}^2$ ($n=3$) であった。行動圏の重複率は、オス間で 51.5% ($n=2$)、オス・メス間で $49.4 \pm 35.3\%$ ($n=8$)、メス間で $23.4 \pm 22.7\%$ ($n=4$) であった。

以上のように、2 亜種間でメスの行動圏面積と重複率はほぼ等しかった。これは両島嶼ともメスが生息している地域の餌資源は豊富で一様分布しているため、メスの行動圏が均一に分布し、行動圏面積もほぼ一定になったことが考えられる。西表島は亜熱帯性気候のため、ヤマネコの餌資源となる動物の種数も多く、餌資源の分布や量は年中ほぼ安定している。対馬は温帯性気候のため、ヤマネコの主な餌資源となるネズミ類や鳥類の個体数は季節変動が大きく不安定で、餌資源が安定して得られる場所は局所的になっている。メスはそのような場所を利用して生息しており、メスの生息地だけを考えるとどちらの島嶼でも、餌資源の様相が同様であったと考えられる。それに対して、オスは餌資源やメスが豊富で均一に分布している西表では、行動圏は排他的になり、行動圏の重複率が小さくなったと考えられる。一方、ツシマヤマネコではメスが“いい場所”に局在しているためオスの中には広範囲を動かざるを得ない個体が多くなり、平均的に行動圏面積が大きく、行動圏の重複率が大きくなったと考えられる。